

日本語における文的トートロジーと 述語的トートロジー

酒井 智 宏*

1. はじめに

(1) に見られるトートロジー「XはXだ」は、これまでコピュラ文「XはYだ」の特殊例であると考えられてきた。

(1) 飛ばなくても鳥は鳥だ。

この考え方では、「XはXだ」は主語と述語からなる文である。しかし、「XはXだ」が常に文であるとは限らないことが、大久保(2000)と坂原(2002)によって指摘されている。問題となるのは(2)のような文である¹⁾。

(2) a. 花子 {でも/だって} 女の子は女の子だ。

b. ペンギン {でも/だって} 鳥は鳥だ。

大久保は(2)のような例における「XはXだ」の「Xは」が主語でない可能性に言及し、坂原(2002:122)は、「日本語には「花子は、女の子は女の子だ」のように、トートロジーが述語の中に押し込められたような表現が存在する。こうした表現は、一般にカテゴリへのマージナルな所属を表す」と述べ、日本語にトートロジー的述語「XはXだ」が存在することを指摘している。

これらの指摘は正しいと思われるが、二つの問題点がある。(i) 文としての「XはXだ」と述語としての「XはXだ」を区別する基準が明示されていない。(ii) 「XはXだ」がいかなる点で述語と言えるかに関する議論が十分に行われていない。実際、第5節で見るように、坂原(2002)は二つの「XはXだ」を混同した議論を行っている。本論文では、二つの「XはXだ」の相違点を明示的に示し、日本語において述語としての「XはXだ」を認定すべき形態論的・統語論的・意味論的証拠を提示する。

2. 文としての「XはXだ」と述語としての「XはXだ」

(3a) と (3b) を比べてみよう。

(3) a. 人形遊びが好きでも男の子は男の子だ。

b. 太郎でも男の子は男の子だ。

これらの文は少なくとも三つの点で類似している。第一に、譲歩表現「でも」が付随している。第二に、特定の対象(ここでは太郎)を念頭に置いて発話される。(3a)では固有名詞「太郎」は用いられていないが、この発話の背後には特定の対象が存在する。第三に、特定の個体がカテゴリ X に所属すること(ここでは太郎 ∈ 男の子)を断定する(坂原 2002)。

他方で、(3a) と (3b) には相違点もある。(4) が示すように、「A でも」の A の部分を主語とし、X を述語とするパラフレーズ「A は X だ」で「太郎 \in 男の子」という断定を表すことが可能なのは (3b) のみである。

- (4) a. #人形遊びが好き(なの)は男の子だ。
b. 太郎は男の子だ。

この相違は、A に相当するのが (3a) では命題であるのに対し、(3b) では名辞であることが原因である²。以降、P を命題、NP を名辞として、(3a) タイプの文を「P でも X は X だ」、(3b) タイプの文を「NP でも X は X だ」と呼ぶ。以下では、「P でも X は X だ」の「X は X だ」が文であるのに対し、「NP でも X は X だ」の「X は X だ」が定型述語相当の表現であることを明らかにする³。

3. 述語的トートロジーの定型句としての性質

本節では、「NP でも X は X だ」における「X は X だ」が「P でも X は X だ」における「X は X だ」よりも形態的不変性が高く、かつ意味が慣用化していることを示し、前者の定型句としての性質を明らかにする。

3.1 他の要素の挿入

「P でも X は X だ」と異なり、「NP でも X は X だ」では他の要素の挿入が困難である⁴。

- (5) a. 人形遊びが好きでも、男の子はやっぱり男の子だ。
b. 飛べなくても、鳥はやっぱり鳥だ。
(6) a. ?太郎でも男の子は一応男の子だ。
b. ?ペンギンでも鳥は一応鳥だ。

また、「P でも X は X だ」は語順を入れ替えて「X は P でも X だ」とすることができるが、「NP でも X は X だ」に対して「X は NP でも X だ」という形式は存在しない⁵。

- (7) a. 男の子は(たとえ)人形遊びが好きでも男の子だ。
b. 鳥は(たとえ)飛べなくても鳥だ。
(8) a. *男の子は(たとえ)太郎でも男の子だ。
b. *鳥は(たとえ)ペンギンでも鳥だ。

さらに、「NP でも X は X だ」において、「NP でも」とは別に譲歩節が現れることがあるが、この譲歩節を「X は」と「X だ」の間に挿入することはできない。

- (9) a. 飛べなくても、ペンギンだって鳥は鳥だ。
b. *ペンギンだって鳥は飛べなくても鳥だ。

以上のように、「NP でも X は X だ」における「X は X だ」は「P でも X は X だ」における「X は X だ」よりも高い凝結性を示す。

3.2 形態的パラダイムの欠如

「P でも X は X だ」には、対立する主張を伝達する矛盾文が存在する。(10-11b-c) は (10-11a) に対応する矛盾文である。

- (10) a. どんなに無力でも、大統領は大統領だ。

- b. 無力な大統領など大統領ではない。
- c. そこまで無力だったら、大統領がもはや大統領でなくなる。
- (11) a. 飛べなくても、鳥は鳥だ。
- b. 飛べない鳥など鳥ではない。
- c. 飛べなければ、鳥が鳥でなくなる。

また、(10-11a) の「P でも X は X だ」と同じ意味を表す形式として、「P である X {も/だって} X {だ/であることに変わりはない}」という変異体トートロジー (12-13) が存在する^{6,7}。

(12) 無力な大統領 {も/だって} 大統領 {だ/であることに変わりはない}。

(13) 飛べない鳥 {も/だって} 鳥 {だ/であることに変わりはない}。

ところが、「NP でも X は X だ」には、対応する矛盾文 (14-15) も、対応する変異体トートロジー (16-17) も存在しない⁸。

- (14) a. *X 氏だったら大統領が大統領でなくなる。
- b. *X 氏である大統領など大統領ではない。
- (15) a. *ペンギンだったら鳥が鳥でなくなる。
- b. *ペンギンである鳥など鳥ではない。
- (16) *X 氏である大統領 {も/だって} 大統領 {だ/であることに変わりはない}。
- (17) *ペンギンである鳥 {も/だって} 鳥 {だ/であることに変わりはない}。

さらに、「P でも X は X だ」の「は」は埋め込み文中で「が」に変わることがあるが、「NP でも X は X だ」にこの変換を行うと容認不可能になる。

- (18) a. どんなに賢くても子供が子供であることに変わりはない。
- b. ねずみを捕らなくても猫が猫であることに変わりはない。
- (19) a. *太郎だって子供が子供であることに変わりはない。
- b. *タマだって猫が猫であることに変わりはない。

以上の事実から、「P でも X は X だ」における「X は X だ」と異なり、「NP でも X は X だ」における「X は X だ」がいかなる統語環境においても形を変えないことが分かる。

3.3 意味の慣習化

「NP でも X は X だ」における「X は X だ」には意味の慣習化が観察される。坂原 (2002: 122) はトートロジー「X は X だ」とトートロジー的述語「X は X だ」に関して、「トートロジーは、マージナルなメンバをカテゴリに引き戻す働きがあるが、そのメンバーがマージナルであるというニュアンスはあまり強く感じさせない。むしろ、マージナルなメンバのマージナル性を薄めるところに焦点がある。これに対して、トートロジー的述語の方は、逆に、カテゴリへの所属を認めた上で、メンバのマージナル性を強調する。しかし、カテゴリへの所属を断定する点では、両方とも同じ」であると述べている。この観察は正しいと思われるが、坂原は経験的証拠を挙げていない。まず、(20a) と (20b) は同じ主張を伝達しているが、(20a) と異なり、(20b) には依然としてタマに対する差別意識が感じられる。

- (20) どうしてタマをいじめるんだ。{a. かわいくてもかわいくなくても、猫は猫だろう/b. タマだって猫は猫だろう}?

同様に、(21a) と異なり、(21b) には、自分のプレゼントに全く問題がないわけではない

ことを認めるニュアンスが感じられる。

- (21) (鳥がほしいと言っていた相手にダチョウをプレゼントして) どうしてダチョウじゃ不満なんだ。{a. 飛んでも飛ばなくても、鳥は鳥だろう/b. ダチョウだって鳥は鳥だろう}?

これは、「NPでもXはXだ」が持つ「NPの指示対象はXらしくない性質を持っている」という含みを文脈によって却下することが難しいためであると考えられる。また、この含みのため、「NPでもXはXだ」はヘッジ表現「立派に」と共起しにくい⁹。

- (22) a. 少々頼りなくても(責任感があるなら)立派に社長は社長だ。
b. ??山田さんだって(あれほど責任感がある以上)立派に社長は社長だ。
(23) a. 飛べなくても(かわいければ)立派に鳥は鳥だ。
b. ??ペンギンだって(かわいいから)立派に鳥は鳥だ。

こうした事実から、「NPでもXはXだ」における「XはXだ」は、「NPの指示対象はXらしくない」という含意を慣習的に持つと考えられる。

以上の事実から、「NPでもXはXだ」における「XはXだ」がある種の定型句であることが分かる。

4. NPの主語性

本節では、NPが「XはXだ」の主語であることを示すことにより、「XはXだ」が一項述語相当の句であることを明らかにする。

4.1 助詞

「NPでもXはXだ」においてはNPが「でも」でマークされうるが、主語が「でも」でマークされる現象は珍しいものではない。

- (24) a. 外野手がフライを取った。
b. あのフライはイチローなら取れた。
c. あんなフライは並の外野手でも取るよ。

通常「が」でマークされる主語が(24b)では「なら」でマークされ、それと対立する発話(24c)では「でも」でマークされている。

「NPでもXはXだ」のNPは「でも」以外に、助詞「も」「は」「が」によってマークされることもある^{10,11}。

- (25) 太郎は{も/は}一応男の子は男の子だ。
(26) ペンギンが一応鳥は鳥であることは確かだ。

これらは通常的主語をマークする助詞と同一であり、「NPでもXはXだ」におけるNPが主語である可能性を示唆している。

4.2 敬語

よく知られているように、主語を対象とした現象として尊敬語化がある。

- (27) a. 山田先生が太郎をご批判なされた。
b. #太郎が山田先生をご批判なされた。

(27) の「ご批判なさる」は敬意の対象が主語の指示対象である場合にのみ容認される。

「NP でも X は X だ」における「X は X だ」は尊敬語化できる。

(28) 花子先生でも、一応女性は女性でいらっしゃる。

(28) で尊敬語化の対象として機能しているのは「花子先生」であり、「女性」ではない。その根拠は次の通りである。まず、「女性」は総称的解釈においては尊敬語化の対象にはならない。

(29) 特定解釈：女性（の方）が {来た/いらした}。

(30) 総称解釈：女性は概して虫が {嫌いだ/#お嫌いだ}。

一般に文的トートロジー「X は X だ」における「X は」は特定の指示対象を指すのではなく、任意の X を指し、総称的に解釈される (cf. 坂原 1992)。このため、「女性は」が統語的主語として解釈される場合、尊敬語化は起きない。

(31) #女性は、虫が (お) 好きでも、女性でいらっしゃる。

したがって、(28) で尊敬語が使えるのは、「花子先生でも」があるからである。また、(28) の「花子先生」を敬意の対象となりえない人物を指す表現で置き換えることはできない。

(32) #奈緒美なんかでも、女性は女性でいらっしゃる。

これは、尊敬語化の可能性が「花子先生」の位置に生起する名詞句に依存すること、すなわち「NP でも X は X だ」における NP が主語であることを示している。

しかし、以上の事実のみから、NP が「X は X だ」の項に相当すると結論することはできない。ウナギ文「X は Y だ」において、「X」は「Y だ」の項ではないが、「は」「も」「が」によってマークされうる。

(33) A：僕はウナギにします。

B：え？ 君 {は/も/が} ウナギですか？

また、ウナギ文の述語「Y だ」は「Y でいらっしゃる」のように尊敬語化できる場合がある。

(34) A：佐藤先生の出講日は月曜日ですが、山田先生は？

B：山田先生も月曜日でいらっしゃいます。

次の 4.3 節と 4.4 節では、「NP でも X は X だ」の NP が「X は X だ」が要求する項を埋める名詞句であることを示す。

4.3 目的語への繰り上げ

補文主語の主節目的語への繰り上げ（私は太郎が責任者だと思った→私は太郎を責任者だと思った）は、ウナギ文には適用できない（坂原 1990）。(35) ではウナギ文の解釈は不可能である。

(35) a. 私は太郎をウナギだと思った。（「太郎 \in ウナギ」の解釈のみ）

b. *私は山田先生を月曜日だと思った。（cf. (34B)）

他方、こうした繰り上げは、「NP でも X は X だ」の NP に対しては適用可能である。

(36) 私は太郎を一応男の子は男の子だと思う。

したがって、NP は「X は X だ」が要求する項を埋める名詞句であると考えられる¹²。

なお、「NP でも X は X だ」の「X は」には繰り上げは適用されない。これは「P でも X

はXだ」の「Xは」とは対照的である。

- (37) a. *私はペンギンでも鳥を鳥だと思いたい。
b. 私はたとえ飛ばなくても鳥を鳥だと思いたい。

これは「NPでもXはXだ」における「Xは」が「Xだ」の項に相当しないことを示唆している。すなわち、「NPでもXはXだ」において、第一のXと第二のXは主述関係にはない。この点で、「NPでもXはXだ」における「XはXだ」は「PでもXはXだ」における「XはXだ」とは大きく異なる。

4.4 等位接続

「NPでもXはXだ」の「XはXだ」は他の一項述語と等位接続することができる。

- (38) a. ペンギンは、鳥は鳥でも、飛べない。
b. 鳥は鳥でも飛べない鳥は？—ペンギン。
c. 静男は、いい奴はいい奴なんだが、変な癖がある。

((38c)は服部1988より引用)

(38a-b)の論理構造は(39)であると考えられる。

- (39) λx [鳥は鳥だ(x) \wedge 飛べない(x)] (ペンギン)

したがって、「NPでもXはXだ」の「XはXだ」は一項述語として機能していると考えられる。

5. 述語的トートロジー「XはXだ」の意味記述

本節では、述語的トートロジー「XはXだ」に意味記述を与え、それにより、間接的に「XはXだ」に構成的意味論が与えられないことを示す。

5.1 意味記述

述語的トートロジー「XはXだ」は次の意味を持つと考えられる。

- (40) 述語的トートロジー「XはXだ」の意味
a. 前提：主語NPの指示対象が述語Xの外延に対して典型的には期待されない属性を持つ。
b. 断定：主語NPの指示対象は述語Xの外延に属する。

この前提と断定の決定は、Ducrot (1972: ch. 3) の議論によって正当化される。文連結における論理関係にとって関与的な命題はその文の断定であり、そうでない命題はその文の前提である。例えば、(41)は(42a)を前提とし、(42b)を断定する。

- (41) 太郎はたばこを吸うのをやめている。
(42) a. 前提：太郎は以前たばこを吸っていた。
b. 断定：太郎は現在たばこを吸わない。

(43)が示すように、文連結の論理関係に影響するのは(42b)のみであり、(42a)は論理関係に関与しない。

- (43) 太郎はたばこを吸うのをやめているからたばこ代を考えなくてよい。
{a. #太郎は以前たばこを吸っていた/b. 太郎は現在たばこを吸わない} から

たばこ代を考えなくてよい。

これを「XはXだ」に適用すると、文連結における論理関係を決定するのは(40b)であり、(40a)ではないことが分かる。

(44) タマだって猫は猫だから、飼ってやろう。

{a. #タマは猫らしくないから/b. タマは猫だから} 飼ってやろう。

それでは、(40a)の前提の存在はいかにして確かめられるであろうか。Ducrot (1972: ch. 3)は、前提を一種の発話行為とみなし、相手がその発話行為に言及する場合があることを観察している。

(45) A: 太郎がたばこ吸うのやめてるんだって。

B: ってことは太郎は今まで喫煙者だったのか。

(45B)の「ってことは」は「君がそういう言い方をするということは」という意味であり、(45A)の発話内容ではなく、前提発話行為に言及している。「NPでもXはXだ」に関しても同様の例を考えることができる。

(46) A: 花子だって女の子は女の子だ。

B: そんな言い方は花子に失礼だよ。

(46B)は、「花子は女の子らしくない」という命題を前提とする発話行為が花子に対して失礼だと述べている¹³。

5.2 否定の不可能性

述語的トートロジー「XはXだ」は対応する否定形を持たない。

(47) a. *花子でも女の子は女の子でない。

b. *ペンギンでも鳥は鳥でない。

この事実は(40)の意味記述から自動的に出てくる。一般に文Sの否定は、Sの断定のみに影響し、前提は保持される。例えば(41)の否定(48)は(49)の情報を持つ。

(48) 太郎はたばこを吸うのをやめていない。

(49) a. 前提: 太郎は以前たばこを吸っていた。

b. 断定: 太郎は現在たばこを吸っている。

(49)と(42)を比べると、断定のみが否定され、前提は保持されている。この原則に従うと(47a)は(50)の情報を持つことになる。

(50) a. 前提: 花子は女の子らしくない。

b. 断定: 花子は女の子ではない。

しかし、XでないものがXらしくないのは当然であるから、断定が成り立てば、前提は自動的に成り立つ。したがって、否定文では(50a)の前提は情報的に冗長であり、(51)のようにこの前提を含まない単純な述語を使っても、情報量は(47)と変わらない。

(51) a. 花子は女の子ではない。

b. ペンギンは鳥でない。

ここでは「Xでない」という単純な否定述語の存在が、「XはXでない」という否定の述語的トートロジーの形成をブロックしており、一種の語彙の阻止(例えば影山1993参照)であると考えられる。

5.3 譲歩節の二つの解釈

坂原（2002）は（52）が（53）の二つの解釈を持つと述べている。

（52）いくら大きいと言っても、猫は猫だ。

（53） a. 解釈1：属性Pの変動は、Xのカテゴリ所属の決定に重要でない。

b. 解釈2：属性Pの変動はしよせんカテゴリX内の変動にとどまる。

（53a）は「大きいかどうかは猫にとって重要ではない」という解釈を表し、例えば10メートルの大きさの猫がいても問題はない。これに対して、（53b）では、「大きい」が「猫としては大きい」と解釈され、実際にはさほど大きくない場合に対応する¹⁴。坂原はこれを「PでもXはXだ」の曖昧性と考えているが、実際にはこれは「NPでもXはXだ」の曖昧性であり、「PでもXはXだ」には（53a）の解釈しかない。実際、（53b）の解釈のもとでは、「XはXだ」は定型述語句としての性質を示す。（54）のように「XはXだ」という形式が崩れた場合、（53a）の解釈は可能であるが、（53b）の解釈は難しくなる。

（54） a. 猫はいくら大きくてもやっぱり猫だ。

b. いくら大きくても猫が猫であることは確かだ。

c. どんなに大きな猫だってやっぱり猫だ。

d. 私は、いくら大きくても、猫を猫だと思いたい。

例えば（54b）は「大きさが猫の定義にとって重要でないことは確かだ」という意味を表し、「さほど大きくないことは確かだ」という意味は表さない。この事実を、「PでもXはXだ」のPの値の変動をXの範囲内にとどめ、「XとしてはPだ」と解釈することができないことを示している。これは（55）が不自然であることによって確かめられる。

（55） ??猫は、猫としては大きくても、やはり猫だ。

これに対して、（56a-b）はいずれも自然である。

（56） a. タマは、いくら大きくても、やはり猫は猫だ。

b. タマは、猫としては大きくても、やはり猫は猫だ。

この対比は「PでもXはXだ」と「NPでもXはXだ」の意味の違いによって説明することができる。「PでもXはXだ」の主語Xは総称名詞であり、例えば（54a）は「任意の猫xに関して、xに任意の大きさを属性として付与しても、xは猫であり続ける」という総称命題を表す¹⁵。この命題から、「カテゴリーXの定義においてその大きさは重要性を持たない」という有意味な命題が導き出される。同じように考えると、（55）は「任意の猫xに関して、xに「猫として大きい」という属性を付与しても、xは猫であり続ける」という命題を表すが、これは自明の理を表しているに過ぎない¹⁶。これに対して、（40）の意味記述に基づくと、（56a-b）はいずれも「タマ \in 猫」という有意味な（特称）命題を表している。「いくら大きくても」「猫としては大きくても」の部分は、程度の差こそあれ、いずれも猫に対して典型的には期待されない属性を表しており、（40a）の前提を満たす。

5.4 「XはXだ」におけるXに関する制約

文的トートロジー「XはXだ」においては、Xの位置に生起する範疇は名詞句のみである。また、名詞句であれば、原理上はどんなものでも生起できる。

（57） a. どんな姿になっても、人間はやはり人間だ。

- b. どんな姿になっても、太郎はやはり太郎だ。
- c. どんな姿になっても、私が愛した女性やはり私が愛した女性だ。
- d. *どんな姿になっても、人間だったやはり人間だった。
- e. *どんな姿になっても、愛されたやはり愛された。

これは、X が述語であると同時に主語である以上、自然な制約である。

これに対して、述語的トートロジー「X は X だ」においては、(40) の意味記述が示すように、X が複数のメンバーを外延に含む一項述語であることが必要かつ十分な条件である。このため、主語 NP の指示対象と述語 X の外延が同一であってはならず、必ず「NP の指示対象 \in X の外延集合」ないし「NP の外延集合 \in X の外延集合」であることが要求されるが、その一方で、X の統語範疇に関しては、それが述語である限りは、特に制限がない。

- (58) a. 確かに彼もひどい男はひどい男だ。
 b. 昨日もまあ寒かったは寒かった。
 c. 彼女もそれなりに愛されたは愛されたんだが、幸せではなかった。
 d. *あの人も太郎は太郎だ。
 e. 今日の太郎も太郎は太郎だ。

X が、(58a) では名詞句であり、(58b) では屈折語尾の付いた形容詞であり、(58c) では屈折語尾の付いた受身述語である。述語的トートロジー「X は X だ」における第一の X が名詞句である必要がないのは、この X が統語的主語でないという事実の自然な帰結である。(58d) は、太郎が特定の個体を指す限りにおいて、「あの \in 太郎」と考えることができないため、容認されない¹⁷。(58e) では、「太郎」が太郎の顕現体 (stage) を束ねた集合を表し、「今日の太郎 \in 太郎」と解釈されるため、容認可能となる。

このように、述語的トートロジー「X は X だ」は慣習的解釈と結びついた述語として機能する一方、X の位置には語だけでなく、句も生起する。この点で、「X は X だ」は形態論で言うところの語ではなく、定型述語句と考えるのが妥当である。

6. 結論

この論文では、日本語に「X は X だ」という形式の定型述語句が存在することを示した。その証拠として、この表現が形態的不変性を示すという形態論的証拠、その前に生起する NP をターゲットとして尊敬語化が可能であり、NP が繰り上げの対象となり、NP と他の主語との等位接続が可能であるという統語論的証拠、全体の意味が部分から予測できないという意味論的証拠を挙げた。述語的トートロジー「X は X だ」は主語 NP の指示対象が X らしくないことを前提とし、X であることを断定する。この特徴付けにより、この述語に対応する否定形が存在しないこと、X の統語範疇に制限がないこと、X が複数の外延を持つ述語である必要があることなどが説明できる。

注

1 これは服部 (1988: 197) のいう「述語句を反復する隔絶反復構文」の一種であると思われるが、大久保 (2000) と坂原 (2002) は服部 (1988) に言及していない。

(i) 静男は、いい奴はいい奴なんだが、変な癖がある。(服部 1988)

また、服部 (1988) は、この構文と文的トートロジー「X は X だ」との異同には触れていない。

- 2 4.1節で論じるように、この命題と名辞の相違に対応して、(3a)と異なり、(3b)は「が」「は」「も」「だって」を用いた表現も可能である。
- (i) 太郎 {は/も/だって} 男の子は男の子だ。
(ii) *人形遊びが好き {は/も/だって} 男の子は男の子だ。
(iii) 太郎が (一応) 男の子は男の子であることは確かだ。
(iv) *人形遊びが (一応) 男の子は男の子であることは確かだ。
- 本文中の例文では「NPでも」「NPも」「NPだって」のいずれかを用いる。
- 3 5.4節で述べるように、この「XはXだ」は述語相当の表現であるが、形態論で言う「語」ではない。項を一つ要求する句であるが、形態的不変性という特徴が見られるため、定型句であると考えられる。
- 4 (6)が容認可能と判断される場合があるが、これは(5)からの類推で擬似的に容認されている可能性がある。その証拠に、「NPでも」を「NPが」とし、「Pでも」との形態的相違を大きくすると、容認度がより低下する。
- (i) 人形遊びが好きでも男の子はやっぱり男の子だ (ということ)
(ii) 太郎が一応男の子は男の子だ (ということ)
(iii) ??太郎が男の子は一応男の子だ (ということ)
- 5 Okamoto (1993) は (7) のタイプの文を容認不可能としているが、筆者を含め、容認する話者もいる。これに対して (8) は完全に容認不可能であり、(7) を容認する話者でも (8) を容認することはないと思われる。
- 6 「PであるXもXだ」という形式の存在は大久保 (2000) と坂原 (2002) によって指摘されている。
- 7 (12-13) の「大統領だ」「鳥だ」には「立派に」を付加することができる。
- (i) 無力な大統領でも立派に大統領だ。
(ii) 飛べない鳥も立派に鳥だ。
- これは、文的トートロジー「XはXだ」が、矛盾文によってXのカテゴリーから締め出されそうになっているメンバーをXのカテゴリーに引き戻す働きをするという坂原 (2002) の観察を裏付けている。
- 8 5.2節で見るように、述語的トートロジー「XはXだ」には対応する否定形が存在しない。そのため、「NPでもXはXだ」に対応する矛盾文 (14-15) が存在しないという事実はここでの論点とは独立の要因に帰される可能性がある。しかし、(16-17) ではXに対して否定は使われていないから、これを否定に関する事実によって説明することは不可能である。
- 9 逆に、「NPでもXはXだ」は周辺的なカテゴリー所属を表すヘッジ表現「一応」「かろうじて」とは問題なく共起する。
- (i) ペンギンだって {一応/かろうじて} 鳥は鳥だ。
「Xだ」はこの点に関して中立であり、いずれのヘッジ表現とも共起する。
(ii) ペンギンだって {立派に/一応} 鳥だ。
- 10 坂原 (2002: 122) は助詞に関する事実には言及していないが、主語が「は」でマークされた例文を挙げている。
- (i) 花子は、女の子は女の子だ。たまにはスカートをはく。
- 11 (26) は埋め込み文であるが、主文では「が」は使えない。
- (i) *太郎が (一応) 男の子は男の子だ。
これは一般に記述コピュラ文において主語を「が」でマークすることができない (坂原 1990) ことの帰結である。
(ii) *太郎が男の子だ。
- 12 ただし、この議論は「XはXだ」が (i) のようにウナギ文述語として使われる可能性を排除するものではない。
- (i) 山田先生も一応月曜日は月曜日だ。
重要なのは、「XはXだ」が項を選択する述語として使用されうるという点である。
- 13 (i) と比べて (46A) がさらに失礼であることから、(46B) が失礼だと主張しているのは、(46A) の前提発言行為だけではなく、発言行為全体ではないか、という疑問が生じるかもしれない。
- (i) 花子は女の子らしくない。
これには次のように答えることができる。Ducrot (1972: 91-92) が述べるように、一般に前提は断定に比べて反論の対象になりにくく、無理に反論すると、話の腰を折ることになり、相手の発言行為自体に対する攻撃となりかねない。このため、「花子は女の子らしくない」という命題は、これが断定として述べられた場合 (= (i)) よりも、前提として述べられた場合 (= (46A)) の方が、反論するのが難しくなる。この意味で、(46B) が批判しているのは、「花子は女の子らしくない」という命題内容そのものではなく、(46A) がこの命題内容を断定ではなく前提として述べているという事実である。

- 14 (52) に対しては (53b) の解釈が優勢であり、(53a) の解釈は多少難しいように思われる。(53a) の解釈を表すためには、むしろ (i) の方が適している。
- (i) いくら大きくても、猫は猫だ。
- (i) に対しては (53a) の解釈の他に (53b) の解釈も可能であるが、(53a) の解釈がやや優勢であるように思われる。しかしながら、以下では、坂原の容認性判断に従い、「P でも」と「P と言っても」の傾向の違いは無視することにする。
- 15 その間接的な証拠として、例えば (54a) の「猫は」に対応するフランス語が総称不定名詞句 *un chat* で表されることが挙げられる。
- (i) *Gros ou non, un chat est un chat.*
big or not a cat is a cat
- 16 これは対応する矛盾文の容認度にも反映される。
- (i) {虎ほどの大きさもある/??猫として大きい} 猫はもはや猫ではない。
- 17 「太郎」を「太郎という名前の人」とする解釈のもとでは、容認される。このときには、「太郎」が普通名詞化している。

参考文献

- Ducrot, Oswald (1972) *Dire et ne pas dire : Principes de sémantique linguistique*, Paris : Hermann.
- 服部 匡 (1988) 「反復を含む構文の性質について—日本語は文脈自由文法で記述可能か?—」、『言語学研究』7、pp. 185-200.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』、ひつじ書房.
- Okamoto, Shigeko (1993) Nominal repetitive constructions in Japanese: The 'tautology' controversy revisited, *Journal of pragmatics* 20, pp. 433-466.
- 大久保朝憲 (2000) 「擬似同語反復文と擬似矛盾文」『文学論集』(関西大学) 第 49 巻 4 号、pp. 23-40.
- 坂原 茂 (1990) 「役割、ガ・ハ、ウナギ文」、『認知科学の発展』第 3 巻、pp. 29-66、講談社サイエンティフィック.
- 坂原 茂 (1992) 「トートロジーについて」、『外国語科学研究紀要』(東京大学教養学部) 40 (2)、pp. 57-83.
- 坂原 茂 (2002) 「トートロジーとカテゴリー化のダイナミズム」、大堀壽夫 (編) 『シリーズ言語科学 3 認知言語学 II : カテゴリー化』、pp. 105-134、東京大学出版会.